Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

地域伝承音楽の教材集の開発と検証
ー「金沢市伝承音楽教材集」作成への取り組みー

荒木泰彦

目的

現行学習指導要領において、歌唱教材で「それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようにすること。」が明記された。これは、前回の「適宜取り上げるようにすること。」からさらに踏み込んだものであり、伝承音楽を小学校の音楽の授業に積極的に取り入れることが求められることとなった。しかし現場での実情は、教科書に載っている全国的に有名なわらべうたや民謡を扱うことがほとんどで、系統付けられた、地域伝承音楽による学習はあまり行われていない。そこで、金沢伝承の「わらべうた」「民謡」「伝承芸能・伝承音楽」をまとめた【金沢市小学校伝承音楽教材集】を作成し実践的に検証することを目的とした。

結果

【金沢市小学校伝承音楽教材集】は、児童の実態・現職教員の意識・地区公民館の意識などの調査を踏まえた上で、伝承音楽研究の理論に則って作成した。

金沢の地域色を全面に打ち出したこの教材集を用いて授業実践を行った結果、児童が遊びや文化に親しみ、楽しみながら音楽的基礎能力を身につけることができる一方策になるうることが明らかになった。

しかし、実践調査は限られた時間の中で、実情の異なる学校で行われたものである。今後教材集が普及しさらなる教育的効果を得るためには、継続的な実践調査とともに、様々な修正が必要である。

方法

教材集作成の手順は以下のようであった。まず、児童の実態や現職教員の意識・要望調査を行った。つぎに、お年寄りからの採曲・地区公民館や伝承音楽保存会への取材や協力を得て、教材曲を収集した。そして、それらの教材曲を系統立てた指導案に位置づけた。関連資料として、範唱や簡易伴奏を載せたCD・各種音声や映像を編集した鑑賞教材用DVDを作成した。

つぎに、作成した教材集の適性を検証するために、市内15校の協力を受け、2回の実践調査を行った。調査内容を分析し、試案版を修正し頒布版を作成した。

内容

教材集作成・検証にあたって、次の4段階で作業を行った。

1. 音楽科教育史にかかわる研究

伊澤修二を中心とした「音楽取調掛」による音楽科教育創始期より戦前までの「日本音楽」を扱った実情を分析した。特に『小学唱歌集』より、国民学校での『ウタノホン～初等科音楽』までの、教科書に載った日本音楽の教材を調べ、質的量的推移を明らかにした。

戦後は、7期にわたる学習指導要領の記載内容と学習指導要領に伴う戦後小学校音楽科検定教科書（765件）の発行内容を分析し、日本音楽の教材曲が、徐々に増え扱い方が多様になっていることを明らかにした。

日本音楽を教材として取り入れた授業実践は、小泉文夫著『日本伝統音楽の研究』を契機に、日教組教研集会や派生した「音楽教育の会」で盛んに行われた。また、コダーイ・オルフ式実践の中で日本音楽を教材として用いる授業実践も見られた。

2. 実態調査の分析にかかわる研究

平成10年9月に前任校で行った児童実態調査が、本研究のきっかけとなっている。担任をしていた学級をはじめ、音楽を担当していた3年生142名を対象にした調査で以下のような結果が出た。〔わらべうたを使った遊び歌の経験は豊富である〕〔友だちへの呼びかけ「名前リレー」は長2度のふしが多い〕〔ふしことばは10種類程を使っている〕〔3年生の実態ではふしことばや呼びかけはDFG音が言いやすい〕〔慣れてくると付点を使ったふしことばが発生する〕

2回目の児童実態調査は平成16年7月に、後述する授業実践調査に先だって、金沢市内15校1100名を対象に行った。以下のような結果が出た。〔話し言葉の発展として、長2度（日本音階の基本）がすり込まれている〕〔幼児期よりわらべうたを使った遊びを経験している児童が多い〕〔身近にある「日本音楽」を「日本の音楽」として認識していない〕

これらの調査から、児童にとって親しみのある日本音楽(特にわらべうた)、特に金沢に伝承されているものを教材化し、音楽科教育に導入することで新しい音楽科教育の方向性を見いだすことを考えた。

NII-Electronic Library Service

Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

さらに、現職教員意識調査により、多くの教員が金沢伝承音楽の教材化を望んでいることが明らかになった。また、地区公民館意識調査により、地区公民館が「伝承音楽の伝承主体」として小学校との連携を強く望んでいることが明らかになった。さらに、現職教員や地区公民館から、教材化に向けての素材になる伝承音楽や伝承者の情報が多く寄せられ、教材集作成への糸口ができた。

3. 教材集作成にかかわる研究

教材集は、『教材曲集』『指導案集』『視聴覚資料』からなる。まず、系統的な学習を実現するために、全体目標（わらべうたや伝承音楽の学習をとして、金沢市の遊びや文化に親しみ、音楽的基礎能力を身につけ、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を身につける。）を設定し、低中高別の学習目標(中心目標と領域別目標)・学習内容を提示するとともに、適応する教材曲を配当した。地域学習の観点から、従来の「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」に加え「文化」領域を新設し、5領域体制とした。

『教材曲集』はのべ65曲準備したが、採曲楽譜化した金沢のわらべうた37曲に加え、全国的に歌われているスタンダード曲も28曲取り入れ、親しみやすいものとした。基本的に西洋機能和声の伴奏はつけず、伴奏パターンを数種類提示するのみとした。児童の声域に合わせアレンジし、派生音は一切使用せず、歌詞も若干修正を加えた。また、曲の由来や歌詞の説明・扱う際の注意事項などの備考を記載した。

『指導案集』は120の指導案を準備した。学年系統を考慮するとともに、学習指導要領への適合状況を一覧とし評価規準・評価方法も明記した。なお、現行のカリキュラムに負担がかからないように、指導案の1単位時間は15分とし、年間学習時間の10分の1程度の指導時間を目処とした指導案を作成した。

『視聴覚資料』は、教材曲集のデモ伴奏と金沢伝承わらべうたの音源（お年寄りの唄ったもの）をまとめたCDと、鑑賞教材用のデジタル編集した映像用資料（3年生以上各学年2・・合計8番組）DVDを準備した。

4. 授業実践調査にかかわる研究と教材集修正

教材集（試案）の適性を検証のため、平成16年7月に第一回、12月に第二回の授業実践調査を金沢市内小学校の協力を得て行った。第一回は15校44授業1164名を対象に表現領域教材の授業実践、第二回は8校21授業649名を対象に鑑賞領域教材の授業実践を行った。児童の関心意欲は概ね高く、親しみやすい教材を用いたことで、「従来の西洋音楽中心の学習から、さらに幅のある音楽の授業を展開することができた」など、実践した指導教員から好評の声を頂いた。特に、低学年でのわらべうた遊びによるリズム感習得、中学年での2音～5音を用いたリコーダースキル、高学年での金沢の文化に親しむ鑑賞活動の充実が高い効果を生んだようであった。一方で、学校や児童の実情による差が見られた。地域で盛んに伝承活動が行われている学校や普段の授業にわらべうた等の日本音楽を取り入れている学級での学習効果は高かったが、伝承音楽への違和感をなかなか拭うことのできない様子も報告された。

この実践調査により、教材曲や指導案の適性・児童の反応などが明らかになり、教材集作成に向けての修正作業を行った。主な修正点は、15分という限られた授業時間内での活動を意識して、教材曲の選択制・指導内容の削減・評価規準の見直し・領域バランス（内容的な）の調整である。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

①学習効果が即効的に現れないこと、②学校や児童の実情によって活用方法・効果に差が出ること、③指導教員の意識改革・教材集への理解が必要であること、である。特に②についての問題は大きく、一律の教材集では、金沢市内全学校・全児童に対応しきれないことが明らかになった。今後継続して児童の実態を分析した上で、汎用性の高い教材集になるよう、さらなる工夫が必要だと強く感じた。

本教材集は平成17年3月に金沢市内60校に頒布する予定である。各校で更に検証を進めてもらい、修正を加える必要がある。今後はプロジェクトチームを立ち上げ、よりよい教材集作成への作業を進めるとともに、教材集の普及活動を行いたいと考えている。さらに中学校と連携し、義務教育9年の系統性を見据えた教材集へと発展させたい。

NII-Electronic Library Service